

箏の記譜法と五線記譜法の相違点に関する一考察

A study on the differences between staff musical notation and musical notation of the koto

鈴木 雪 絵

キーワード：箏、大日本家庭音楽会、記譜法、宮城道雄、箏曲童謡、お山の細道

1. はじめに

OECD（経済協力開発機構）のPIISA調査によると我が国の児童生徒について、「思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題、知識・技能を活用する問題に課題」「読解力で成績分布の分散が拡大しており、その背景には家庭での学習時間などの学習意欲、学習習慣・生活習慣に課題」「自分への自信の欠如や自らの将来への不安、体力の低下といった課題」が見られるとされ、そのため、知・徳・体のバランスを育むことが必要であるという旨が指摘されている。この上で教育の根本にさかのぼった法改正を踏まえた審議が行われ、中央教育審議会の答申が出で、平成20年に学習指導要領の改訂が行われた。そこでは小学校、中学校及び高等学校を通じた音楽科の改善の基本方針について次のように述べている。

「国際社会に生きる日本人としての自覚の育成が求められる中、我が国や郷土の伝統音楽に対する理解を基盤として、我が国の音楽文化に愛着をもつとともに他国の音楽文化を尊重する態度等を養う観点から、学校や学年の段階に応じ、我が国や郷土の伝統音楽の指導が一層充実して行われるようにする。」ⁱ

ここに示されている様に、私達は音楽科においても「日本人」としてのアイデンティティをしっかりと持つことが出来る教育を行う必要がある。そして私達教

育者自身もそれを持つ必要がある。

こうしたことをふまえてか、日本の音楽を学ぶことは義務教育の場において、表面的には一般的なこととなっているが、今でも、どのような楽器とどのような音楽を選択するかは大きな課題であることに間違いはない。

和楽器の中でも箏は、一本の絃で一つの音高を出すという楽器の特性をもち、奏法も比較的容易である。そのため授業の中で指導しやすく、学生同士で合奏も出来ることから、授業において用いられることも多い。また、音楽科の改善の基本方針にもある「我が国や郷土の伝統音楽に対する理解」を得るという意味でも、一般に親しまれてきた箏という楽器は適している。

しかし、授業において箏を演奏する際、問題になってくるのが「楽譜の読みづらさ」である。日本音楽の楽譜は、西洋音楽の楽譜に慣れ親しんだ者にとって一目で音高や曲想等を全て理解し演奏出来るものとは言いがたい。

そして「楽譜」に対しての概念も日本と西洋では大きく異なっている。箏の音楽の世界では、それまで地歌や箏曲に携わっていたのは「当道」という組織に所属し「検校」「勾当」などの位を持つ盲人音楽家たちに限られていたため、教授するのに楽譜を特に必要とせず、主として口伝にて師匠から弟子へと受け継がれてきたものである。ところが西洋音楽では、新たに書かれた作品を書きとめる手段として、楽譜は創作活

動の中で大きな比重をしめる。音価と音高が五線の上に定められ、誰でも客観的に旋律などを把握出来るため、五線譜は楽譜の記譜法として多くの場合用いられてきたのである。

この研究ノートでは、西洋音楽と日本音楽との記譜法においてどのような隔たりがあるのか、また、学習指導要領の改訂により教育現場において日本音楽や和楽器に触れる機会が増えたが、それらの隔たりを解消する手段があるのかを、宮城道雄によって子ども向けに作曲された箏曲集「箏曲童謡」の中から、「お山の細道」を取り上げて考察しようと思う。この箏曲集は、箏を始めたばかりの子どもでも演奏出来る様に手ほどき用の平易な楽譜が掲載されているため、これを用いての演奏の機会も少なくない。今回の箏の楽譜は生田流で用いられている「大日本家庭音楽会式」の楽譜である。

2. 西洋音楽の記譜法

私達が普段よく目にする楽譜は、五線記譜法とよばれる記譜法で記されている。この記譜法は、その名の様に五本一組の水平線からなる譜表に音符を記入し、音符と線との位置関係から個々の音の高さを示し、また同時に個々の音符の形態からその個々の音および休止の長さを表示することを主とするものである。ⁱⁱ

大日本家庭音楽会式で書かれた「お山の細道」の楽譜を五線記譜法の記譜上の規則に従い楽譜作成ソフトを用いて作成するとこの様になる。(譜例1)

3. 日本音楽における記譜

大正以降、箏の音楽においても「大日本家庭音楽会式」や、山田流において主に用いられている横書きの「博信堂式」といった新しく考案された楽譜によって箏の稽古は上流階級のみならず一般の家庭にも普及してきた。演奏をする際に、仮に五線譜があれば誰が演奏してもある程度同じ音楽が再現できるが、楽器の演奏や歌唱において、微妙な音の伸縮、間の取り方といった細かいニュアンスを五線譜に全て書き示すことは難

表 1

しょうが 唱歌譜	唱歌の際の仮名をそのまま記す。
こうめい 孔名譜	指孔の開閉状態を文字(=識字(しきじ))で記す。【管楽器：簞簞など】
かんめい 管名譜	管名を文字(=識字)で記す。【管楽器：笙】
げんめい 弦名譜	弦名(一、二、三、～斗、為、巾)で記す。【弦楽器：箏】
かんどころ 勘所譜	左手の押さえ所(=勘所)を文字や図形で記す。【琵琶など】
つぶつけ 粒付譜	打楽器のリズムを記号で記す。【打楽器：小鼓など】

しい。

日本音楽の楽譜は元来その楽器や流派により表記の仕方が異なり、次のように様々な種類がある。(表1)これらは、楽器の操作法を数字・文字・記号で示す奏法譜としては厳密さに欠けることもあるが、旋律のフレー징の表示や暗記には便利である。

これらの楽譜のうち、箏の楽譜は弦名譜いわゆるタブラチュア譜であるが、箏の絃は、奏者が箏に向かって座ったとき体から一番遠い絃より順に「一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、斗、為、巾」と呼ばれ、楽譜上にもその絃名で表記される。古くは、『教訓抄』^{こまのちかざね}(^{こまのちかざね} 伯近真、1233年)の中にもあるように、13本の絃はかつて「^{じん}仁、^ち智、^{れい}礼、^ぎ義、^{しん}信、^{ぶん}文、^ぶ武、^ひ翳、^{らん}蘭、^{しょう}商、^と斗、^い為、^{きん}巾」と呼ばれていたが、現在では、「一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、斗、為、巾」と形を変えて呼ばれているⁱⁱⁱ。この中で「斗、為、巾」の三つだけが漢数字ではなく以前の絃名のまま使われているというのは、漢数字の「十一、十二、十三」をそのまま使うと、例えば「十一」の表記があった場合に「十一」の絃を弾くのか「十」と「一」の絃を弾くのかを区別する必要が出てくるからである。

また、箏を演奏するためには、日本音楽独特の音名というものも理解しておかなければならない。西洋の音楽において、十二半音の各音には下図の様にAからG(ドイツ語の音名の場合にはHも用いられる)のアルファベットがあてはめられており、調性もこの音名を用いた表記がなされている。

それと同じように、雅楽を中心とした多くの日本音楽では、これらの音に次のような漢字名が割り当てられ、西洋と同じく、調子を表すのにもこの音名が用いられている。(表2)

表2

英名	A	#A	B	C	#C	D	#D	E	F	#F	G	#G
和名	黄鐘	鸞鏡	盤渉	神仙	上無	尙越	断金	平調	勝絶	下無	双調	鳧鐘

ここではシャープ系とフラット系の異名同音（#A=Bなど）は全てシャープ系に統一した。

4. 五線譜との共通点・相違点

「お山の細道」の楽譜（譜例2）は大日本家庭音楽会式で書かれているが、その特長として、音楽が上から下に、また、右から左に向かって時間が進んでいくということが挙げられる。縦長の大きな四角い枠一つが一小節を表し、それを四つに仕切った内の一つが四分音符の長さを表している。更に半分に分割したものは四分音符の半分つまり八分音符を表している。

五線譜の場合は、横方向に、また、左から右へと時

譜例2 「お山の細道」（「箏曲童謡」より）

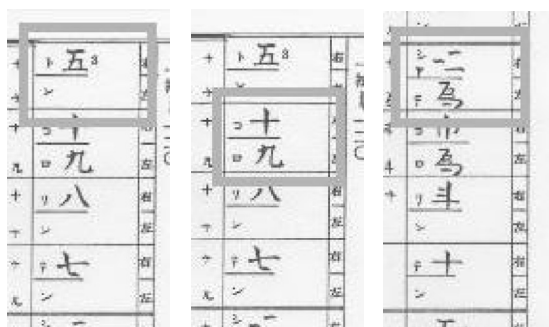
間が進んでいくために、一見、全く異なる物の様な印象を受けるが、毎拍ごとに区切ったりはしないものの、小節を表す枠は実線（五線譜の場合、小節線）で区切られており、その枠を更に拍ごとに分割し、分割された小さな枠（空間）に細かい音符を規則正しく当てはめていくという手順をふむところではこの箏の楽譜と五線譜はよく似ている。

それは、箏の楽譜の成り立ちと深い関係を持っている。前で述べた様に、元々箏は楽譜を必要とせず口伝にて伝えられてきたが、明治40年、逓信省の役人だった坂本五郎が、口伝にて教授される箏の旋律をなかなか覚えられずに困っていた新婚の妻の為に箏の楽譜を発明し、そこから現在の様な楽譜が使われるようになったためである。このとき、坂本が五線譜の拍節の概念を取り入れて楽譜を作ったという経緯があるために、箏の楽譜と五線譜はよく似ているのである。また、坂本は、箏を更に普及させようと、その後逓信省を辞めて大日本家庭音楽会を設立し、楽譜出版を本格的に始めた人物でもある。^{iv}

演奏を行うにあたり楽譜を見てみると、初めに、「第一絃（黄鐘）」「平調子」という指示があるので、まずこれに従い、平調子の音階が鳴る様に調弦する。これらの音高は必ずしも固定された絶対音ではなく、楽譜の指示によって第一絃の音が基音として定められ、それによってその都度適した調子に調弦するものである。この曲の場合は、第一絃を黄鐘つまりAの音に調弦し、第二絃以降は譜例3で示す音列が鳴る様に調弦するものである。

譜例3 平調子（第1絃＝黄鐘（おうしき）＝A）

そして、楽譜に書かれている漢数字は、その拍で弾かれる絃の名前を表している。四分音符を表す枠の上段に漢数字が一つだけ書いてある場合（譜例4）はそのまま四分音符で弾き、漢数字が2つ縦に並ぶ場合（譜



譜例 4

譜例 5

譜例 6

例 5) はその拍の表拍と裏拍にそれぞれの絃を、つまり八分音符 2 つとして弾く。なお、複数の漢数字が横に並ぶ場合(譜例 6) はそれらの音を同時に鳴らすものである。

五線譜の場合は、絃名がそのまま音高を示す箏の楽譜とは違い、漢数字の代わりに音符を五線の間や線の上に置き、その置かれた位置で音の高さを示している。音の長さは、音符の符頭の色や符尾の形で区別される。

その他、五線譜には見られない特長として、○や△がある。○と△は五線譜でいうところの四分休符と八分休符、また●と▲は弦を弾き直すことなくその前の音符から四分音符または八分音符の長さだけ継続して鳴っている状態、つまり、五線記譜法でいうタイの様な役割を果たす。

また、漢数字や○と△の図形で表す他に、絃名の左側に「オ」「ヲ」が付加されることがある。これらは箏独特の奏法の 1 つで、「押し手」と呼ばれる。この指示は、弦を弾く際に絃の柱の左側を左手で押し下げ、元の音符の音高から「オ」は 2 半音 (1 音)、「ヲ」は 1 半音高い音を鳴らすものである。五線記譜法でいうと、ダブルシャープやシャープがちょうどこれにあたる。

ここまで見てきて分かることは、箏の楽譜と五線譜は全く違う様でいて実はとてもよく似ているということである。明治末頃に現在の形になったというこの箏の楽譜が五線記譜法の影響をうけたであろうことから分かる様に、縦書きと横書きという大きな違いがあ

るとはいえ、基本的にはこの二種の楽譜はほぼ同じものであるといえよう。

5. まとめと今後の展望

こうしてみると、楽譜は必ずしもそれが音楽の全てではなく、いずれの楽譜も、ただ単に記号や約束事が客観的に記載されているだけである。それ以外の細かいニュアンスを補うためには、楽譜に書かれていない客観性の無い部分を駆使することで、個性のある演奏というものが成立するのである。その演奏を豊かにするためには、普段から様々な物を見て様々なことを感じる感受性が、箏の音楽でも西洋の音楽でも大切である。

楽譜はあくまでも最大公約数的な言語であり、教授する側もされる側も豊かな感受性を持ちあわせるということで、双方の隔たりを解消する必要がある。

近年、西洋楽器と和楽器の演奏者が同じステージに立つことが多くなってきた。西洋音楽を学んできた者にとって、和楽器の為に書かれた楽譜を読み、それを演奏出来るということは、和楽器のことを知る上でも、また、自分自身の演奏にもプラスに働くことである。

また、芸術に触れることが少ない子どもたちには、何らかの形で働きかけが有効である。とりわけ生の演奏に触れることは、知識のみではなく、芸術そのものと直接触れ合うためのきっかけとなるものである。教師や親など、身近な大人が子どもに対して出来ることは大きい。このような活きた芸術に触れる機会をさらに増やし、日本の音楽も含めた様々な音楽に触れさせることで、豊かな音楽経験を積ませていくことが出来ると考える。

お山の細道

葛原 しげる 作詞
宮城 道雄 作曲

♩ = 120

5
おやまのおやまの ほそみちは たれたれとほーる たれとほる
おやまのおやまの ほそみちは たれたれとほーる たれとほる

9
きつねのおやこの とほるみち つき よに たぬきの
やききじこきじの とほるみち つき よに うきぎの

13
とほる みち
とほる みち

譜例1 「お山の細道」(五線譜)

参考文献

平野健次ほか監修「日本音楽大事典」平凡社、1989
田中健次「ひとめで分かる日本音楽入門」音楽之友社、2007
福永千恵子「やさしく学べる箏教本」汐文社、2003
釣谷真弓「おもしろ日本音楽史」東京堂出版、2000
團伊玖磨「私の日本音楽史」日本放送出版協会、1999

文部科学省「中学校学習指導要領解説 音楽編」教育芸術社、2008
宮城道雄「箏曲童謡 第二集」大日本家庭音楽会、2009
千葉優子「日本音楽が分かる本」音楽之友社、2005

ⁱ 文部科学省「中学校学習指導要領解説 音楽編」教育芸術社p. 3

ⁱⁱ 平野健次ほか監修「日本音楽大事典」平凡社p.224

ⁱⁱⁱ 釣谷真弓「おもしろ日本音楽史」東京堂出版p.30

^{iv} 坂本正彦「三代記」大日本家庭音楽会p. 1